

漁況海況予報事業^{*}

阪本俊雄・竹内淳一

吉村晃一・武田保幸

調査船「わかやま」仲井孝夫他6名

目 的

本県沿岸及び同沖合の海況と本県沿岸漁業の漁況をモニタリングして、海況ならびに海況と漁況及び資源との関係に関する研究を行なう。同時にこれらの情報を漁業関係者ならびに関係機関に提供して操業と漁業経営の合理化に資する。

方 法

昭和60年度漁況海況予報事業実施方針（水産庁）による。

結 果

1. 海況の概要 黒潮中心部の潮岬南での離岸距離（哩）と流路（B, C, D, N）は以下のとおりで、4月前半に一時15哩と著しく接岸したが、6月前半まで20～40哩とかなり離岸、7月以降2月前半まで15～30哩とほぼ接岸傾向を継続。2～3月に一時40哩と離岸したがまた接岸傾向となった。

月	1985年						1986年					
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
前半	15 C	30 C	25 B	20 C	20 C	20 D	30 N	20 C	25 C	20 N	20 N	35 ^{C-D} ~ W
後半	30 C (30)	40 B (40)	20 B	15 C (15)	20 C	20 N	15 N	20 C (15)	20 D (15)	30 N (15)	40 C (20, 25, 35)	25 N

()は「わかやま」の観測

9～10月、1～2月、3月は遠州灘冷水塊が一時消滅してN型流路。総じて、6月以降は接岸傾向であったが、20哩以内への接岸の安定した状態持続はなく、20～40哩と変動は小きざみに起った。

このような黒潮変動を反映して、紀伊水道側沿岸の水温は4～6月は低目、7～11月は高目、1～3月は低目に経過した。熊野灘側は7～8月に表面で平年より高目であったほかは全般的に低目。9、10月に特に低かったがこれは強い南風による地形性沿岸湧昇によるものである。

※漁況海況予報事業による。本事業報告は「昭和60年度漁況海況予報事業結果報告書」として別途報告している。

2. 漁況の概要

内海マダイ 1984年冬春季の異常低温などが影響した1984年級群加入規模低下が原因とみられる低水準で経過。

外海マダイ 1982年以降の中底層低温化のため極めて不振。

紀伊水道タチウオ 黒潮の比較的接岸をみて漁はある程度上向いたが、1975年以前の高水準への資源回復みられず。

シラス 前述の春季の低水温で春漁はよくなかったが7月以降の黒潮接岸のためか夏～冬期のカタクチシラス漁良く、年漁獲量は各地とほぼ同年並。

紀伊水道サゴシ 魚群多かったが魚価安く曳縄漁本格化せず。

外海サワラ 今漁期(1985.9～1986.4)は黒潮が接岸傾向であったので、その影響の及ぶ印南では9.1tと大不漁、影響の比較的少ない御坊でも29.8tと平年以下。熊野灘定置網の宇久井、太地では4、5月にそれぞれ56.2t、29.6tと近年にない大漁。

紀伊水道マルアジ、マサバ マサバ多く、漁期も11月までと長く続き両種ともまずまずの漁。

ヨコワ 1985年に比べ1986年冬期漁は不振。

ビンナガ 紀南域の曳縄ビンナガマグロ漁(トンボ)は遠州灘沖冷水塊消滅と黒潮の接岸がもたらした沿岸域での漁場形成によって2月にすさみ172.1t、串本152.6t、田辺15.6tと近年にない好漁。

カツオ 4、5月の漁況は沖合の黒潮水温が高くかつ沿岸域が低温であったため19～21℃のカツオ釣獲適水温巾小さく、不漁。1986年3月は中旬以降19～21℃の好適水温海況が沿岸沖合の広範囲にわたり好漁。

ハマチ 4月上旬の一時的黒潮異常接岸でモジャコは好漁であったが、秋、冬のハマチ・メジロは内外海域ともに不漁。

外海アジ、サバ、イワシ類 2そうまき網はイワシ類が減少、サバ、マルアジが増加して好漁。ことにマルアジの伸びは大きく、1985年は1984年より約1,000t増加した3,776t。1そうまき網では航海数の減少著しく、ウルメを除いて漁は全般に芳しくなかった。

串本棒受網のウルメ(当才漁)漁は好漁。

スルメイカ 紀伊水道夏イカは10年来の大不漁、熊野灘の冬漁も不漁。

ソーダガツオ 勝浦棒受網メジカ漁は1984年のように熊野灘への暖水舌形成が顕著でなかったため、それが形成された10月を除いて一般に低調。

ブリ 黒潮の接岸で潮岬に係る暖水の塞ぎ止め効果があり、熊野灘各定置網では好漁。